

ラーベの「飢餓牧師」について

— 第三部 —

平 田 達 治

ゲッツ家に於いて厳しい現実を知ったハンスは、クレオペアの事件の責任を転嫁されて、ゲッツ家を去る。「僕は非常に多くのことを体験した。僕の内部は混乱しているようであった⁽¹⁾」という彼の言葉の様に、フランチスカとの結合が果されていたものの、この時の彼は、未だ新しい究極の世界を発見出来ない動揺の時期におかれていたのである。現実を体験したものは、最早素朴に、過去の思い出の世界、単なる空想の世界、血肉のそなわらぬ憧れの世界へ還ることは出来なかった。然し又、現実からの遊離は理想の空中楼阁化であることを認識した男も、だからと云って、虚偽と欺瞞にみちた世界を是認し、己れの魂を殺して巧妙に泳いで行くには、余りにも善良な憧れを秘め、魂の故郷ハイマイトの信仰に導びかれていたのであった。自分の動揺する心に、一つの拠所を与えようとして起稿された「飢えの書」執筆も、結局は数日にして放棄される。そして、最後まで故郷ノイシュタットの世界を代表していたシュロッタ―ベックおばさんとグリューネバウム伯父さんの死は、新しい故郷を発見し創造するまでのハンスを、事実上の故郷喪ハイマイト

失者ロイゼという運命においたのであった。この時彼は、動揺という状態から更に進んで、虚無ニヒルガへの危険に直面していたといえるのであるが、「彼はモーゼスのやむことなき意欲を想い出し、頭をうなだれ、自分の柔弱さを恥しく思った」⁽⁸⁾という一文に見られるように、裏切者の友人の姿から学んだ積極的な行動への意志と、フランチスカの愛の力とによって、その危険を脱し、究極のラーベの世界を象徴する漁村グルンツェノウに赴き、真の故郷を見出すことが出来た。そして、この漁村へ彼を導いた人々こそ、ラーベの作品に特徴的なゲッツ中尉やブラウ大佐やこの村の老牧師ヨージアス・ティレニウス等の老人達であった。此の小説の構成から見ると、ゲッツ中尉は、故郷ノイシュタットの人がハンスに対する守護の力を失っていった頃、彼等に代り、世に出たハンスを導く人間として、彼の前に現れたのであった。そして第三部に這入って、ハンスが、故郷の最後の人達の死によって、故郷喪失者となった時、今度は新しく見出さるべき故郷を代表する人間として、ハンスの上に力を及すようになったのである。即ち、ノイシュタットの人々は、第一部を根拠にして、第二部の世界にまで、主人公の上に何らかの影響を与えていたのに対し、ゲッツ中尉その他の老人は第三部の世界の任人として、グルンツェノウの性格を代表し、逆に、第二部の世界にまでその力を及しているのである。斯る型の人間は処女作以来ラーベの作品に常に見られる人物であって、「年代記」のバツハホールダー、「春」のオステルマイアー、「大戦後」のバルト中尉、「森からの人々」のウレックス、フィビガー、「アブ・テルファン」のヴァッサートレーター、「屍体運搬車」のグロイビィガーの騎士等をおげることが出来る。彼の大部分は、解放戦争に参加した愛国的勇士と云う共通点を持っているが、「この戦争への参加は、ラーベにとって人間価値の試金石である」⁽⁹⁾とのルカーチの言葉にも拘らず、社会的政治的行動性をそなえた人物ではなく、寧ろ隠者的な変人に近い人間であって、多くの体験によって人生の透徹した達観の域に達しているところにこそ、彼等の特徴がある。こうした人物によって導かれたハンスは、彼等によって代表されるグルンツェノウにやって来るのであるが、

まず比処で展開される事件を見ながら、この世界が如何なるものであるかをさぐってみよう。

一旦この漁村へやって来たハンスは、ゲッツ中尉の承認を得て、フランチスカを花嫁として迎えるべく大都會へ出発する。テオドル・ゲッツは破産して既に死んでおり、その邸宅には誰も住んでいなかった。ハンスはやつとこのことで、フランチスカを捜し出し、グルンツェノウへつれて来る。そして、彼はティレニウスの副牧師となり、彼の後継者となる。フランチスカと共にこの漁村の姿を知り、そこに流れる尊い生命力を感じて、自分の歩んだ飢えの道を反省する。それから一年たった秋の或る日、二人の結婚式が教会であげられる。そのパーティの最中に沖に火の手が上り、船火事が起る。漁夫達と共にハンスも救助に赴き、多くの人達が小舟で救われて来る。この遭難者の中に、クレオペアとあのパリの女ヘンリエッタが混っていた。彼等二人はその後暫く牧師館にとどまり、介抱される。

そして後者の口から、クレオペアとモーゼスの生活は結局破れ、モーゼスのひどい仕打からクレオペアを救った経緯が物語られる。クレオペアは、自分のあやまった行為の罪を懺悔して、静かに氣息をひきとる。ヘンリエッタはロシアの友人の許へ赴き、幸福な結婚をする。モーゼスのその後については、只、枢密顧問官になったと伝えられているだけで、それ以上のことは最早この漁村へは伝わって来なかった。斯くて、老牧師の後を継いだハンスとフランチスカとの間には、子供が生まれ、幸福な生活が続くが、母に抱かれた赤ん坊は、今尚ハンスの机上に輝いている光の玉に、もうじつと、何かを憧憬する眼差を向けているのであった。以上が第三部の筋のあらましである。

ハンスがこのグルンツェノウの地で一生をおくることを決心した時、彼は今一度この新しい世界から自分の過去と対決し、それによって自分の新たな使命を自覚し、この世界の本質を一層深く洞察して、自己とこの世界との全き結合に達せねばならなかった。即ち、クリスマス朝の日の早朝、彼は父アントンの姿を心の目に浮かべ、次の様に報告したのである。彼は「お父さん、あなたが指し示して下さった道をあゆみ、厳しい努力によって真実を捉えよう」とつとめ

(4) のであつたが、ひとたび世の中に出てみると、偏見に眞実を求める誠実なる憧れは却つて彼に苦惱を招くものとなり、「常に変らぬ歩みで前進することは出来ず」、「世の中は自分にとってあまりにも眞摯で嚴肅なものに思われたので、他の人のように笑いながら、それに向つて行くことが出来なかつた」(5) のである。既に見たように、彼の道は多くの誘惑や苦しみによつてはばまれ、魂を傷付ける事の多いものであつたが、それは決して個人的な責任とされるものではかつた。世の中とはそれ程に複雑であり、多義的であり、不思議な存在であつたのである。低きより高きを求め憧れる者の道は、必然的に、そのような艱難の忍耐が要求されたのである。然も、そこでは、知識は幸福のために役立つという安易な考えは許されなかつたのである。「彼が得た最初の知識や体験は、自己の本性の調和を破るにしか役立つなかつた」という様に、知識経験を得たがため、却つて、ハンスは不幸になり、自己に対する自信と他に対する信頼を失いかけた事が屢々あつた。「他のすべての疑いに加えて、それらは彼に、自分自身に対する疑いをも惹き起した」(6) と述べられている。然し、正しい憧れを失わず、より高きものを信じて誠実に生きる者にとつては、虚無への危険もその姿を変え、現実の厳しさの悟り、大地に根差さぬ理想の無力への反省という意味を持つた、有用なる体験に変貌する。「正しい人間になり、あらゆる事柄に正しい尺度を与える事は、容易なことではなかつた」(7) が、その様な人間に成る者こそ、高きも低きも見極めた人間でなければならぬ筈であつた。「人類の解放者は低きより立ちのぼつて来ます。そして泉が低きより湧き出て土地をうるおす様に、人類の田畑も永遠に低き所よりよみがえるのです。お父さん、人間はこの高さへの痛ましい努力シュネトレイセン以上によいものを何も持っていないのです……この努力の中シュネトレイセンにおいてこそ、人間は、どんなにちっぽけな土地、どんなに狭い環の中でも無限なる領域の支配者として、自分自身の支配者として立っているのです。……苦しきもこんなに貴いものです……しかし、僕は眞実を見出しました、即ちむなしきものと純粹なものを、仮象と本物を見分けることを知つたのです。僕はもう物事を恐れ

ません、と云うのも僕には愛がついているからです」と、亡き父の魂に向って報告したのである。

此処に於いてハンスが達した世界、この作品での究極のラーベ的世界の一端が始めて知らされたのであるが、その本質は、ラーベ文学に於いて特徴的な「小さな環」の考え方である。そして、この考えを明確にうたっているのが、三十五章の冒頭にかかげられている詩である。ところが、ラーベは自分が描いたハンスの足跡を振り返った時、所謂世の中なるものをあまりにも悪魔的なものに描きすぎ、ハンスの成長に不可欠である事を十分示すことが出来ず、世の中での体験は、ハンスの良き面を破壊するのみで、ハンスは今も元のハンスと変わらず、元の特性が強調されているにすぎぬのではないかとの反省から、即ち、「森からの人々」のおちいった作品のモットーと内容の不一致⁽⁶⁾に対する憂慮から、詩人はその詩をおぎなつて、次の様に繰り返し強調しているのである。

「ハンスの修養の歴史が何んど多くの場所に附着していたことか、凡ゆる心の動きの出発点が屢々なんとほるかな過去に及んでいたことか、全く不思議なくらいだった。この瞬間に初めて彼は、自分のこれまでの人生が如何に豊かなものであったかを、幼年時代の沈み去つた世界から、シュロッターベックおばさんや伯父さんと一緒に消え去つたノイシュタットの世界から、遍歴時代の過ぎ去つた世界から、どの様な財産をこの北海に臨むグルンツェノウの新しい生活へたずさえて来たかを、正しく認識したのであった。」

この言葉は、ハンスの成長にとって、彼の今迄の体験の如何なるものも欠けてはならなかつた、すべてはその各々の在り方に於いて、彼の血肉になつたのだとの意味を有するものであるが、その反面、斯る意味が「この瞬間に初めて」真に通用するようになった事こそ注目すべきであり、それが通用するのは、低き世界ではなく、一段高きグルンツェノウの世界に於いてであり、ハンスは今こうした世界に達したという事、即ち換言すれば彼は自分のまわりに新しい世界、ラーベの言葉で云うなら一つの「環の世界」を創造した事こそを表白していると解さるべきであつて、次

の森を詩で詠われたらさういふのであらう。

Auf alle Höhen

Da wollt' ich steigen,

Zu allen Tiefen

Mich niederneigen,

Das Nah und Ferne

Wollt' ich erkünder,

Geheimste Wunder

Wollt' ich ergründn,

Gewaltig Sehnen,

Unendlich Schweben,

Im ewgen Streben

Ein Nieergreifen—

Das war mein Leben.

Nun ist's geschehen;—

Aus allen Räumen

Hab' ich gewonnen

Ein holdes Träumen,

Nun sind umschlossen

Im engsten Ringe,

Im stillsten Herzen

Weltweite Dinge,

Lichtblauer Schleier

Sank nieder leise ;

In Liebesweben,

Goldzauberkreise—

Ist nun mein Leben.

ありとある言あつてこゝに

われ、のぼらんとし、

ありとある低きところ

われ、くだらんせし。

近きものの、遠きものの

われ、さぐらんとし、

神秘なる不思議の奥を

かくかくて、ここにいたれば、

ありとある場所より、

われ、かちえたるは

優美なる夢ならむ。

さてや今、囲まれてあるは、

いとせまき環の内に、

いと静かなる胸内に、

われ、きわめんとせし。

あこがれるはつよく、

さまようははてなし、

たえまなきはげみにも、

ひとつだに得るものぞなし—

そが過ぎし日のわがくらし。

はてなくひろきことごと。

淡き青なす絹のとばり

しずしずと沈み去りぬ。

愛のいとなみのうち、

黄金の魔法の環のうち—

そが今のわがくらし。

みのりを意味して「秋」„Herbst“と名附けられているこの詩が象徴しているもの、特にこの詩の中心を成す「環の世界」の概念を明らかにするために、同じように「環」という語が見える二十六章の挿話を看過することは出来ない。その筋はこうである。美しい王女が魔城に閉じ込められ、悪魔に見張られていた。城壁の隙き間から彼女の姿をみとめ、美しい声を耳にした若い騎士は、強く心を惹かれる。勿論、彼は王女と何の關係もない自由な身であったが、そこをさらず、彼女が閉じ込められている塔のまわりをめぐるのであった。彼は憧れを抱き乍ら塔のまわりをめぐるうちに、他の多くの人の足跡に気付き、或る人は名譽欲の道を、又他の人は偽善者の道を歩んでいる事を知る。そして又人間の道は遙か遠くまで通じているのを知ったが、彼は、この城のまわりをめぐる間に、一層立派になり、誠実になり、男らしくなった。彼のめぐった道、それは狭い環ではなかった—それには純粹なもの、美しいものがそだつ凡ゆる広さがあった。塔の処女を救い出さねばならぬという確信が、この環を破るのではなく永遠にまで拮げたのであり、心の狭隘さに陥らぬよう彼を守ったというのである。「環」の属性は本来「狭い」という点にあるが、この環は決して狭いのではなく、人間をとりまく真実や美が成長し得る広さを持っている点にこそ、その特性がある。狭い環が決して狭い環ではない、„Es war kein enger Kreis“—広き環となる—「ハンスの生活がどん

なに狭い環の中に入れられたとしても、それは決して狭隘な生活ではなかった」と、ラーベは自分の説く「環」の不思議な特性を強調するのである。詩にも詠われている様に、「いと狭き環のうち、いと静かなる胸の内に、はてしなく広き事々」が含まれているというこのパラドックスを成立せしめている環こそ、疑いもなく「黄金の魔法の環」と称され得るが、如何なる魔法の作用によって斯様になるのであろうか。「処女を救い出さねばならぬという確信が、この環を永遠にまで⁽⁴³⁾ 拮げた」とある様に、そこに働く力はこの確信の出発点を成している処女に対する騎士の愛である。しかも、斯様な力を持った象徴的な愛を考察する時、老牧師ティレニウスが、愛を二つに分けて、次の様に説いている言葉を看過す訳にはゆかない。

「私の愛、さて、その愛のうち死すべき方の部分は彼方の土地の緑りの墓地に埋めております。そしてその愛の不死の部分は、これまで私の生活をやわらげ、あらゆる労苦を減じ軽くしてくれた様に、私の死をもより甘いものにしてくれるでしょう。」⁽⁴⁴⁾

愛は二つの部分にわけられる。死すべき部分と不死の部分であるが、老牧師の場合は既に前者が墓地に埋められているに反して、ハンスの場合は共にそれがこの環の中に実現し働いているのである。即ち、フランチスカは、彼にとって結婚の対象として前者であり、更に彼個人ではなく、第二部の世界に於いて示された様に、人間の魂を和げ、愛の絆を蘇らせる時、人間愛を象徴するものとして後者の永遠なる愛の主体となる。斯様に、愛の二つの面が具象的な姿、即ち一人の処女に於いて象徴されていることは、ラーベにおいて極めて特徴的な事柄である。愛の魔法、愛の働きに依って狭い環がはてしない広い環になる、前掲した如く、「……どんなに狭い環の中でも無限なる領域の支配者として、自分自身の支配者として立ち、」更に「苦しみも幸福や喜びと同様に貴い、——いや屢々それよりも貴い」ものになると云った変化がおこるのである。斯る変化はラーベの作品の中心点を成すものとして他でも屢々描かれてい

る。「樅の木のエルゼ」„Else von der Tanne“ 1864 の中では、三十年戦争の戦乱によって理性を失った村人達は、純粋な美しい処女のエルゼを、却って、魔女と看做して撲殺してしまう。村人に通用する常識、それは純粋なものが魔女であり、狂った村人が正しい人間であると看做するものだったのである。然し、斯様な批判の出来るのは転換された立場からのみであって、どこまでも常識は常識として通用する。だからこそ、転換者の立場からのみ、「彼女は生きてゐる、然るに我々こそが死んでゐるのだ」„Sie lebt, wir aber tot“ の言葉が吐かれるのである。「勝利の花環」„Im Siegeskranze“ 1866 の強調する立場も、狂女の姉と一旦愛情の絆で結ばれた妹には、元のノルマルな世界に引きもどされても、却ってそれがアプノルマルな世界に思われてならない——狂女との世界が寧ろ純粋な世界であり、常識の世界が非人間的な異常の世界に変ずる転換の立場である。「帝王の冠」„Des Reiches Krone“ 1870 では、癩に罹った騎士に許婚の処女が毅然として手を捧げた時、彼等はこの世の存在権を失ったが、彼等の達した「私達二人にとって世の中は消え去ってしまった、が私達二人—お前と私は救われたのだ」との立場も同様のものであると結論出来る。こうした詩人ラーベに共通してみられる立場を総括して、愛による価値転換の立場と名付けることが出来る。ハイエークが自著に於いて、次の様に論じているのはこの立場をよく説明しているものといえよう。

「諸価値の根本的な価値転換がおこなわれる。人間は正常な組織の中心から自発的に退き、自分自身の中から生活の尺度を獲得したいとのひそかな乃至は公然たる要求を諦める。その代り生活秩序の中心として彼には『最高のレジ—』が現われる。『神』と命名することは極力避けはするものの、彼はこれに依って純粋な形而上的な関連点を発見したのである。……愛の奉仕は神の奉仕となる。最高の段階に於いては、人間の存在は犠牲に於いて実現される。生はそれを捧げる者にとってのみ本来の意味で獲得され得るのである。」⁽⁶⁾

自分を犠牲にし、人を愛する愛は常識の世界を貫き、表面の現象を越えて、内面の真実まで迫る力を持っている

る。愛をもって諸事に臨む時、今迄見向きもされなかつたつまらぬものの中にひそむものの真価を知ることが出来る。又、常識的に価値あるとされていたものの如何に無価値なるかの実体をあばくのである。此処で我々は愛によって常識を越えて新しい価値を発見し、創造することが出来るのを知るのである。この認識こそ、この価値転換の中心を成す考え方なのである。この行為の実行こそを、体験に支えられた人間によって果されているのが、あの「いと狭い環」の世界なのである。だからこそ、そこでは、無限なる新しい価値あるものの発見が可能であり、こよなく広き事々の存在や創造の可能性が存するのである。処で、この小さきもの、ありふれたものに価値を見出す態度は、「石まさまさま」„Punte Steine“ 1853 の詩人シュティフター Adalbert Stifter (1805—1868) のそれとよく類似しているのに気附かれるであろう。彼の文学觀を表白した「石まさまさま」の序文には次の様に記されている。

「風の吹くこと、水のながれ、穀物の生長、海の波だち、春の大地の芽ばえ、空の光、星のかがやき、これをわたしは偉大だと考える。壮麗におしよせてくる雷雨、家々をひき裂く電光、大波を打ちあげる嵐、火を吐く山、国々を埋める地震などを私は前にあげた現象より偉大であると思わない。いや、むしろ、小さいものと考ええる。なぜなら、それらも、はるかに高い諸法則のはたらきによって生れたものにすぎないからである。——中略——

外的な自然においてそうであるように、内的な自然、すなわち人間の心についても事情はおなじである。⁽⁹⁾

自然に関する尺度は人間の生活にもあてはまり「調和と公正の法則」がおこなわれる日常生活、それを最も重要視している点もラーベと類似しているが、それにも拘らず、二人の間には大きな相違がある。この相違を視ることによつて、一層ラーベの世界が明らかにならう。シュティフターの偉大と見做すものは如何に小さなものであつても、それは最初から美しく愛すべきものであり、森の奥深くで輝く石なのである。然るに、ラーベにあつては、それは屢々都会の煤煙で色あせた石であり、「魂の平安」と愛の価値転換の実現する世界は、騒音と混乱にみちた現実の世界

と、憧憬にみちファンタジーに支配された理想の世界という相反する二つの世界の境界線上に置かれているのである。即ち、愛と云う至難の術によってはじめて、軽業師のように支え得、都会の煤煙の汚れを磨く苦しい努力によってこそ、輝いている世界なのである。斯る行為、斯る努力が現実の幾多の障害や矛盾によってさまたげられることを見過さぬ時、この愛による転換こそ、この小論の第一部にも掲げたラーベの詩片、「これこそ詩人の使命だ」と詠っているラーベ文学の象徴とでも云うべき言葉「かげから光をとりいだす」ことだとも称し得るであろう。

既に右の説明でも、現実との関連点に触れているが、いま形而上的意味からみた環の世界は、この作品の筋の展開に於いておかれている。グルンツェノウの世界を分析する時、一層その特徴を明らかにするのである。更には、この小論の課題であり仮説であった詩的レアリスムとの関連性を解する上にも、大きな示唆を与えてくれよう。グルンツェノウは、現実在の場として、北海に面した貧しい漁村であった。この小説の主題であるハンスの Hunger は、そこでは、「幾百万の人達に働きかけ、人類をその道に保ち導いて行く、静かで思慮深く、心棒強い努力シュトレイベンになった」のである。老牧師ティレニウスの説教で讃えられている「眞実」「自由」「愛」という言葉とあわせ、既に「魂の調和と均衡」に向っていた Hunger が、愛を象徴するフランチスカに於いて実現され、受動的ではなく能動的シュトレイベン性格と創造性とを具えたものではなく、具体なるものに於いて実現され、受動的ではなく能動的シュトレイベン性格と創造性とを具えた努力シュトレイベンに発展したのである。だから、彼は「勤労」という行動を求めようになり、「人間として当為づけられている義務」を果そうと自覚するのである。「勤労と愛が彼等二人の心をゆさぶった」のであり、二人は「愛情の中で生も死も恐れない」生のたくましさを得たのである。小さな環の世界は、そこに生きる人間の行動によって、偉大な力のある大きな環であるべく、この漁村での具体的現実的事件に於いて、その能動的性格、その創造的行動性が実現され、立証されて、現実性がうらづけられねばならなかった。故に、作者はこれを示すために、ハンスとフランチスカ

カの将来に於いて、それが果されるだろうとの読者の推測にゆだねることに満足出来ず、初稿の内容を変更し、船火事のモチーフを考え出したものと解される。第一部の冒頭でも少し触れた如く、初稿では、ハンスの永遠なる憧れが、この世の有限な存在であるフランティスカとの結合で充されるといふのは、多分その純粋性に矛盾するとの考えからであるう、フランティスカは突然死ぬことになっていたし、モーゼスもその破壊的な欲望のためにハンスの腕の中で死ぬという筋書になっていたのである。然るに、若しそのようなようになっておれば、当然これまで述べた解釈は不可能であるし、有り得べき現実的蓋然性を弱め、作者の強調するところが矛盾するのが明らかなので、それらはすべてとりはらわれ、更に、ハンスの出発点とこの到達点とは、その質的な高さにおいて全く異なることを説得する為にも、モーゼスは、まさしく「パリ」で、その異常な生命力を持って欲求を充し続けると云う非情な現実性が与えられたのである、又、ハンスとフランティスカにあつては、船火事という事件によって、その愛の行動性が実現される、という、より自然な現実関連の実証が与えられたのである。自分の結婚式の最中に起る船火事に際し、小舟に乗って救助に向うハンス、岸に運ばれて来た遭難者の手当をするフランティスカの姿に、我々はこの環の特性が証明された現実の姿を見るのである。斯くて、彼等は、この行動を通じて、今迄の導かれ助けられる受動的人間から、今や人を導き救う能動的な行動性をそなえた人間になったと言えるであろう。遭難者の中に、クレオペアとヘンリエッテがいたのはあまりにも偶然的であるが、この二人に関係のあつたモーゼスの姿をもう一度呼び出して、第三部でのモーゼスの描写の著しい減少をおぎない、二つの型の憧れを描こうとする最初の意図に沿った結末をつけようとしたのだと考えればこれもうなずけよう。非情な憧れの犠牲になつたクレオペアは愛と誠を失した自分の生そのものによつて、自己の罪の全き反省のもとでさえ、死すべき運命に定められねばならなかつたのであるが、逆に、先には、失なわれた人間として登場したヘンリエッテは、フランティスカの愛の力に触れ、今度は後者の本性の分身として、クレオペア

を救う役目を担い、環の世界に属すべき人間として現れたのである。

斯くて、このグルンツェノウこそ、この作品においてハンスの到達した究極のラーベ的世界であり、その特徴は以上に見た通りであるが、此処にはたしてこの世界は第一部のノイシュタットの世界や、第二部の騒音に充ちた醜い現実の世界と如何なる関係にあるかと云う、この小論の根本的な問題が前面に押し出されて来たのである。これに解決を与えることが、グルンツェノウの世界、即ちラーベ的世界の性格を、全体との関連に於いてより一層明らかにすることになり、更には、詩的リアリズムとの関連性を解明する鍵になるのである。それには、ポングス教授も重視している、この作品の海のモチーフに注目しなければならぬ。グルンツェノウはまさしく北海に面した漁村であった。ハンスがこの地へ来て、はじめて海を見た二十八章の最後の所には次の様な一文がしたためられている。

「彼が息気をきらし、喘ぎ乍ら丘の上に立った時、眼前には海が横たわり、夕方のにぶい光の中にひらけていた。

そして、霧が水平線をかき消し、海の面をつたって、この荒涼とした海岸にまで流れて来るのだった。ずっと下手の右の方の岸には、グルンツェノウの小屋の窓から、赤味がかつた微光がもれていた。

ハンスが心にかがいた海は、こんな風ではなかった。彼の夢の中に現れた海は、明るい日のもとで、無限につつき、この世の与え得る最高の輝きにきらめいていた。今、それは別の、全くちがったものであった。」

夢に描いていた海と、実際の海の光景は全く別物であったとのこの言葉は、ラーベに於いて常にそうであるように、単に自然の描写に向けられたものではなく、海の姿でこの漁村の置かれている厳しい現実の实体を象徴しているものなのである。処が、この小説での実際の海は第三部のここではじめて登場したのに、「海」„Das Meer“と云う言葉は、既に第三部のゲッツ中尉に導かれたハンスが丘の上からはじめて大都会を見降ろす場面に見出される。この場面に於いても、先の場面と同様、彼の描いていた都会と実際のそれとは全く別物であったと述べられている。

「ハンスは驚き乍ち、自分の前に横わる燃える輝きを凝視し、足下の無限の底から伝わって来るように思われるにぶい響きとざわめきに聴き入った。——中略——

『これが都会なのだ、僕はそれを夢に描いていたが、夢とは全く別物だ。』と告白し、更に、この都会を称して、『「わうと海まこころであらう」と述べている。』

斯くてこの「海」のモチーフは、海と大都会との同質性を説くことによって、グルンツェノウの世界が、現実から遊離した隠者の世界でないことを示すものである。蓋し、大都会＝海と云う等式は、疑いもなく、その現実性の点に於いて成立するのである。一見貧しく淋しい辺鄙な漁村であるグルンツェノウは、ハンスをして、「現実だ、現実だ」と叫ばせたように、あの都会の不調和音ともききとれる絶えまない海のざわめきによって、決して空想のしのびこむ余地のない現実への意識に、常に、めざめさせられていたのであり、しかも、「人間の心を知るためには、なにも世の雑踏をかけずりまわる必要はない。海岸に立ち、波のたわむれを眺め、それに耳をかし、自分の人生の出来事乃至は、このまわりの小屋に住む漁民達の生活に思いをはせる時、多くの事が知れるのである。」と説く老牧師の言葉にも見られる様に、本質的には決して活気のない閑散とした村ではなく、そこでは多くの知識を得、体験を重ね得るのだとのラーベのあの「世の中」の概念からも、当然、「大都会」にひけをとらない多様性を具備している筈であった。然し、不調和音をとどろかせ、波浪を巻き立たせ、烈風を吹き寄せて迫るこの北海に屈するならば、この地もあの第二部の世界と同様、ハンスのとどまる所とならなかつたであらう。違うのである。「今、ハンスは全く別の世界に立っていた……」。彼の足が踏みつける固い地面は、ノイシュタットの神聖な土地とも、あの大都会の平土間や舗道とも全く違った響きを出すのだった」とある様に、前二者の世界とは全く異っていたのである。如何にして異っていたかと言うと、この漁村の人達は、「はげしい気まぐれな天候とやすみなくきびしい危険きわまる戦いを、きわめて真

剣に、無言で、はげしく続けている人達」だったからであり、夫と六人の息子をことごとく海にとられた母の苦しみを一人一人が耐え、「壊れやすい小舟に乗って、海なる自分達の墓場の上に常にただよう人々」だったからである。彼等には、この恐しい海を避けての生活はなかつたし、又これに屈した所には死があるのみであった。こうした戦いを支え、「人をしてこの地に耐えるようにせしめるものこそ」ハンス同様彼等の中にめざめている「愛への最も神聖なる憧れのみ」であった。だからこそ、ハンスもこの世界に属することが出来たのである。

斯くして、グルンツェノウの世界、このラーベ的環の世界は、全体的関連からも、実のないあの空想の世界と、何の救いもなく魂を奪われた現実の世界のいずれにも属さず、この二世界の境界線上に、あやうくもたくましく、愛によって身を保っている世界であると言えよう。受動の世界、静止の世界ではなく、ホラリチー極極の間に張られた緊張の上に保たれている世界である。海によって示されている現実を回避することなく、屈することなく戦う人々に象徴されている態度は、正に、あの有名なラーベの標語「星を見上げろ」「横丁に注意しろ」と云う二者を実行にうつしたものであり、足は地に、眼は星に向けられていられるものであるとも言え換えられる。更に、下に怒濤する海をひかえたこの世界の位いする所、「天と地の間に」と云う美しい詩的な表現を与える事も許されよう。第一部の世界のように、純粋な理想のみに生き得る天でもなく、又あるがままの現実のみの支配する地でもなく、その両性質を綜合している他ならぬ「天と地の間に」位いするという訳である。

此処に用いることの出来た普通名詞が、ドイツ詩的レアリスムスの命名者であるルートヴヰの主著「天と地の間に」„Zwischen Himmel und Erde“1886の固有名詞と同一であることは、真に興味深いものがある。その小説の結末の所には、こうしるされている。

「人間は己が為に己が幸福を用意し、自己の胸に自からの天を拡げる。……自分自身の内に天を持たぬものは、万

有の中にそれを求め空しく終る。汝、理性の導きに従え、但し、感情の聖なる悴を傷付けな。在るがままの世界を責めて身をそむけるな。その正当な評価につとめよ。さすれば汝自身に対しても公平ならん。そしてこの意味でこそ、汝の道が天と地の間にあらんことを。」⁽⁸⁾

彼の手紙にも明らかのように、在るがままの世界に顔をそむけ、天から授けられる幸福を望むべきでもなく、その反対に、天を信ぜず、貴い感情を殺すべきでもないと言う意味で、「天と地との間に」あれ、と説くルートヴッヒの、幻想と現実の再創造の主張、真の「理想こそ中間に在る」⁽⁹⁾との主張は、「飢餓牧師」でのラーベの立場と如何によく似ていることであろうか。彼等の目には、幻想を追求すると映った浪漫主義、詩を忘れ理想を失ったと見えた現実主義、この二者に対する時、その類似は、文学の根本思想の同質性にまで達するのである。蓋し、グルンツェノウのハンスの世界も、空想と現実から、長い過程を経て、再創造された、中間に位置する世界ではなかったか。詩的現実主義、もしくは、芸術的現実主義なる造語と立場とを説いた、ルートヴッヒの「小説研究」の一節から言葉を借るなら、第一部の世界のハンスは「空想に翻弄された」ハンスであり、第二部の世界は反対に素朴なハンスを絶望させ、「空想を完全に抑圧した」⁽¹⁰⁾世界であったのに対して、第三部では、ハンス自からが自分のうちに、大きな調和と愛とを具えた環の世界を創造したのであり、前二者のいずれの要素をも兼ねそなえた、凡ゆる関連を持った世界に達したのであると言えよう。ルートヴッヒによって唱えられた、現実を詩にたかめる創造のイデーこそ、現実の個々の現象を、空想の媒介によって、相互の關係をもった統一性のある全体につくりかえる意味に於いて、現実を再創造する力であったが、それは、この小説の、あの調和と平安への Hunger が、すべてを関連づけ、魂の融合をもたらす愛によって、現実から再創造された詩的な完全な世界を生んだ立場に他ならない。いみじくも、この小説の主導原理^{ライトキチーン}であった善き Hungerこそは、再創造する力であったからである。これを説得するかのように、二人の主人公の間に生れた嬰兒が、父ハンスの

机上に今尚輝き続けている祖父アントンの光の玉に見入っている、この小説の一番最後の部分には、正にこう記されている。「子供の目が、輝くガラス玉にじつと見入っているあの様子は、世界を破壊し、そしてそれを再びたてなおすあの Hunger が、もう働き始めているのであろうか。」と。此処に、第一部でたてた仮説は、単なる仮説にとどまらず、ルートヴッヒとの関連に於いても、明らかに立証されたと言断してもはばからぬであろう。

処で、こうした再創造の仕方は極めて倫理的であると言わねばなるまい。調和の精神とは中庸の倫理である。「この作品には、人間の両極端の運命が表現されています。両極端の運命とは、浮薄なものと神経質なもの運命なのです。理想はこの中間にあるのです。」と、自作「天と地の間に」を評して、ルートヴッヒも自から良心の浮薄と過度をいましめ、いずれにも偏せざる中庸の道を説いているが、既に見た如く、現実の偏重も理想の偏重もよしとせぬ「森からの人々」の法則も、調和と平安への Hunger を抱いて隣人への愛に生きるグルンツェノウの世界の倫理も、共に中庸の倫理である。詩的リアリスムスの立場は、二人の例を見ただけでも明らかなように、美的概念よりも倫理的概念が優位を占める文学の立場であり、倫理の問題が中心テーマになっていることが多い。思いかえせば、ラーベのこの小説が最初から二つの相異なる Hunger を並列させていたこと自体明らかにそれを裏書きしている。先に、第一部ではモーゼスの Hunger との比較に於いて、知識も能力も、善なる意志の欠ける時、積極的に悪をなすものとして動機、善が強調されたが、第二部の空想のむなしさの指摘による動機、善に対する批判、第三部の、体験と行動の重要性によって語られた成果への志向とによって、浪漫的色彩の濃い動機主義に、その動機の善意と共に、結果の善を唱える結果主義の要素が加えられ、この二者を共に要請する立場が至上のものとして描かれたのである。ラーベにあつては、こうした中庸の倫理が最高の生活術であり、庶民的な日常性に適合するのであり、常にこれが重視され、強調されて来たのである。その一はこの小説の結語である。「人間の一つの世代は、次の世代へ移り、一つの世代は、更に次の世代へ生活の武器を譲渡す

る。「人の子よ、帰れ」と云う叫びが、最後にひびき渡った時、はじめて、それと共に二人の少年をクレッペル通りから世界にいざなつたあの Hunger が生れるであろう。ハンス・ウンヴィルシュユ、汝の武器を譲りたまえ」とある。この言葉は、歴史的なものを記念的に捉えた C・F・マイアーとは、なんと異っている事であろうか。マイアーの作品はことごとく歴史小説であり、その主人公はすべて歴史的英雄であるのを見てわかるように、その天性の素質に起因する彼の英雄偉人に対する崇拜は、歴史とは偉人の伝記であり、偉人によってつくられるとして、人間の世界を一回性で捉えようとしたものであった。換言するなら、この一回性の人生観とは、英雄主義であり、天才的個人主義であり、反庶民的、非日常的である。これに対し、「年代記」の序文をはじめ、あらゆる箇所、既述のような言葉を吐いているラーベの歴史観は、庶民的であり集団的であつて、彼の歴史小説は、未來的性格のもとに、一回的な歴史性を失つて行くと言つて行くその特徴の中にも、多回的な人性観が語られており、これらは彼の文学の本体が日常性、庶民性にこそ在ることを物語っている。その二は、モーゼスがついに野望を達して、枢密顧問官になつた時、「その言葉の最も恐ろしい意味で、市民的に死んだ」と書かれてゐることである。肉体的に死ぬ筈だつた初稿が変更され、モーゼスは枢密顧問官になり乍らも、市民的な死と云う象徴的な死が与えられている。それは、この小説に説かれてゐる市民的モラルによつて要求された死であつた。枢密顧問官と云う位は、グルンツェノウの価値評価の目もりにはなかつたのである。市民的モラルに従えば顧問官への栄達は、死の宣告に他ならず、最も恐ろしい意味で、人生の敵対者を意味した。蓋し人生を担つてゐるエレメントこそ、「年代記」で「偉大な創造の力よ、汝永遠の愛よ」と叫ばれ、又「憎み合うためではなく、愛し合うために私は在るのです」と、この小説のモットーとしてうたわれた日常的、市民的モラルであつたからである。

これらは、また、詩的レアリスムス一般にも通用する性格であろう。アイヘンドルフの「のらくら者」の粉屋のせ

がれば、ヴァイオリンを片手に、夢みながら世に出、王子とまちがえられたが、そのまま本当の王子になると云う幸運を得ることが出来た。これに反して、ケラーの仕立物師は、王子の仮面をはがされ、人をあざむいた罪を人前での屈辱を以ってあがなわねばならなかった。彼は最後に死ぬところを救われ、結婚して幸福になりはしたが、それは仮面の通用する世界からのものではなく、職業に対する勤勉と儉約の実行という、日常的、市民的、モラルの遵守に依つて得た幸福であった。又、この点に關し、フォンターネの「思い出の書から」の中には一層興味深い描写が見出される。

一八四三年三月十八日の革命の日、フォンターネは、ベルリンで革命に参加し、自分も革命を担う一人と感じた。翌朝、疲労のための熟睡から目をさましてみると、薬局を經營している自宅の店先には、婦人子供を主とする大勢の人達が集っていた。最初、彼は、前日の革命騒ぎで負傷した夫や父のために、薬を買いに来ているのだと思つた。だが、本当はそうではなかった。何時もと変らず、朝早くから来て待つていた人達は、怪我人の為の薬買いではなく、前々から三ヶ月に一度は、病気の夫のために、肝油を求めに来るいつもの客であり、ランプ用にと、肝油を買いに来るなじみの子供達だったのである。このことを知って、フォンターネは驚き、前日の狂気じみた振舞を反省したのであった。善良な婦人達は、革命という大事件のあつた翌日も、前日の夫達の騒ぎなど知らぬげに、常の如く、病人のために肝油を切らすことが出来ず、なくなつたランプ油を求めに来なければならなかった。彼はこの驚きをこう結んでいる。「自由は在り得たのです。肝油は在らねばならなかつたのです。全く日常的なものが、常に勝をおさめるのです。そして、平凡なものが、最も多く勝を得るのです。」ある意味では最も現実的なものである革命も、善良な市民にとっては、もう一つの現実たる日常性の前から退かなければならなかつたのである。ラーベの作品にみられた日常性は、こうしてドイツの詩的レアリスム一般の特徴として考えられるのである。

人生は舞台での役柄のようなものだ。人生に於いて、各人は自分に与えられた役柄を、指示されたように演ずる。

劇が終ると、王の役をやったものは王のマントや王冠を、乞食になったものは乞食袋や杖をかえしてしまふ。人生も丁度それなのだ。そして結局、その役柄の上下貴賤、主端役の別によってではなく、自分の役割を如何に演じたかによって、その人の価値が定まる。⁽⁴⁸⁾ このような常識的な平凡な市民的モラルを、二人の主人公を通して形象化したラーベの「飢餓牧師」は、再創造による浪漫的要素と現実的要素の綜合と云う点で、中庸の倫理を説くドイツ詩的レアリスムスの文学思潮をまさしく担うものであり、此処に説いたように、その代表作品の一つと看做すことが出来る。発展小説というその性格から、時間的経過の中に実現されたこの綜合は、あまりにもよく詩的レアリスムス一般の主張に適合しているが故に、そして欠点の少い作品であるだけに、ラーベの世界観をよくあらわしている最長の主著であり乍ら、却って、これ以後の作品に比べ、ラーベ的な癖の少い作品となっているように思われる。故に、それだけ一層、詩的写実主義文学の一般性をそなえた代表作であると言えよう。

(完一以上で本誌十一卷三号及び十一卷一号と共に三回に渡ったこの小論を結ぶ)

- 註(1) Bd. 6, S.330
- (2) Ibidem, S. 363
- (3) Georg Lukács: Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts, S.232
- (4) Bd. 6, S.431
- (5) Ibidem.
- (6) Ibidem.
- (7) Ibidem.
- (8) Ibidem, S.432
- (9) 「星を見上げろ」とか「横丁に注意しろ」といった考え方や „Ein Messer wetzet das andere, und ein Mensch den anderen“ という多くの文学的思想性をかかげ、主人公を通じてそれらを具象化しようとしたのであるが、その意図はあまり

にも大きく重すぎるものであつたので、ラーベには初めての發展小説であるこの「森からの人々」では十分消化出来なかつた。

(10) Bd. 6, S.432
(11) この詩は、ラーベの抒情詩の時期に當る一八六一年九月二日に出来たものである。元の形では次の様になつていたのであるが、この作品に入れる時、本文のように多少の変更をみた。ラーベ自身が妻ヘルタ (Bertha geb. Leiste) と婚約を結んだ時に、その喜びと自分のおかれた新しい立場とを詠つた彼の体験詩である。これが作中においても、フランチスカの愛を得たハンヌスが、その喜びをうたい、自分の違つた世界をうたつたものとなつてゐる。

Auf alle Höhen
Da möchte ich steigen,
Zur kleinen Blume
Mich niederneigen,
Die tiefsten Tiefen
Möcht ich ergründen,
Von allen Wundern
Möcht ich verkünden,
Gewaltig Sehnen
Unendlich Schweifen
Im ewgen Streben
Ein Niergneifen
 Num ist's geschehen,
 Vom Weltennun
 Ward mir gegeben
 Ein süßer Traum.
Nun sind umschlossen
Vom engsten Ringe
Im stillsten Herzen
Weltweite Dinge.....
Lichtblauer Schleier
Sank nieder leise;
Im Arm der Liebe—
Goldzauberkreise,
Ist nun mein Leben.

- (12) Bd. 6, S.442
(13) Ibidem, S.334
(14) Ibidem, S.386
(15) Siegfried Hajjak: „Der Mensch und die Welt im Werk W. Raabes“ S.117
(16) 「石の知物」の序文のこの訳は、手塚富雄先生の岩波文庫訳であるものである。
(17) „Licht aus Schatten zu greifen— Das ist Dichterberuf.“ 人文論究十一卷三号 五十一頁 註(1)参照。

- 18) Bd. 6, S.443
- 19) Ibidem, S.438
- 20) Ibidem, S.442
- 21) Ibidem, S.439
- 22) Ibidem, S.368
- 23) Ibidem, S.202
- 24) Ibidem, S.392
- 25) Ibidem, S.383
- 26) Ibidem.
- 27) Ibidem, S.393
- 28) Ibidem.
- 29) 共び「森からの人々」の中で主人公 Robert を導く二人の男、天文学者の Ulex 老人と警察書記 Fiebiger によつて語られたる言葉である。前者はその理想主義的な人生観が後者には現実主義的な人生観があらわれてゐる。
- 30) Otto Ludwigs Werke in vier Teilen, hrsg. V.A. Ejoesser, Teil 3, S.188
- 31) O. Ludwigs Werke, in 3 Bdn. hrsg. v. V. Schweizer, Bd. 3, S.7
- 32) 上記の語彙本に「ニーチェの言葉の」部を参照せよ。その標記は「Wir Deutschen lassen uns entweder von der Phantasie fortreiben, oder wir unterdrücken sie ganz. Von der Mitte des Weges lockt uns ein anderer Zweck. Wir werden unsers ursprünglichen Zweckes zu bald satt, ein anderer taucht im Glanze der Neuheit vor uns auf, wir folgen diesem, und ein dritter wohl macht uns den zweiten gleichgültig und verlassen wir die ersten nicht ganz, so wollen wir nun zwei, drei Zwecke erreichen, worunter alle zwei oder drei leiden. Otto Ludwigs Werke in 3 Bdn. hrsg. V. Schweizer, Bd. 3, S.363
- 33) Bd. 6, S.463
- 34) 註(3)に同じ。
- 35) Bd. 6, S.463

- (36) 「雀横丁年代記」の序文にも、「一つの時代はその為し遂げた事業の成果を、必ずや次の時代に伝えるべきものであり、又幸にして、人類が大津波の為に前代の遺産を悉く奪い去られ、再び最初からその苦勞を繰り返さねばならない時代というものは殆んどないのである。」と、よく引用される言葉を述べている。
- (37) Bd. 6, S.461
- (38) ショットレスの戯曲「ミツユブリン」からとったものであつて、「飢餓牧師」の扉の所に独逸語訳でしるされている。
„Nicht Mitzuhassen, / Mitzulieben bin ich da“
- (39) J. F. マインツェマンの „Aus dem Leben eines Taugenichts“ 1826 の主人公。
- (40) G. ケラーの „Kleider machen Leute“ の主人公。
- (41) Th. Fontane: „Aus den Erinnerungsbuchern“ 1951, Reclam.
- (42) Ibidem, S.49
- (43) 「森からの人々」の十七章で Ulex 老人が説きかせる言葉。
特に、この「飢餓牧師」と共に三部作を成している「屍体運搬車」 „Der Schudderump“, 1870 との比較におつて。
- (44)

註の中で Bd. 6 の巻の註に W. Raabes *Sämtliche Werke* (Braunschweizer Ausgabe), herausg. v. Karl Hoppe の巻数を意味する。

— 関西学院大学専任講師 —

